

「北欧から学ぶ ICT 教育」～ICT で主体性は育てられるか?～



1. 研究背景

近年、日本では GIGA スクール構想のもとで ICT 教育が急速に進められ、授業の中で ICT を使うことが当たり前になりつつある。一方フィンランドでは、学力低下を背景に授業のデジタル化を見直し、紙の教材に戻す学校も出てきている。

このように、日本とフィンランドでは ICT 教育に対する動きが対照的であり、ICT を「どのように使うべきか」を改めて考える必要がある。

2. 研究目的

本研究では、フィンランドを中心とした北欧諸国の ICT 教育の実態を踏まえながら、学力向上だけでなく、主体性を育てるという観点から ICT 教育の意味を考えることを目的とする。

3. 現状分析

フィンランドで指摘されている学力低下の理由としては、子どもが同時に多くの情報を処理することが難しいことや、デジタル機器の使用時間が長くなりすぎることが挙げられている。一方、日本では 2018 年の PISA 調査で読解力の低下が問題視され、ICT 教育の推進が進められた。

4. 主体性を重視した ICT 活用

フィンランドのタンペレ市の授業では、ICT を使っても教師がすぐに「正解」を示すことはしない。例えば反対語の学習では、児童がそれぞれ自分なりの答えを考え、タブレットや黒板を使って意見を共有する。その後、考えの違いや理由について話し合うことで理解を深めていく。

5. 考察

以上のことから、日本の ICT 教育も、すべてをデジタル化するのではなく、目的や学年に応じて使い方を考えていくことが重要だといえる。

また、ICT は学力を直接伸ばす魔法の道具ではなく、主体性や学び方を育てるための補助的な役割として位置づけるべきである。そのためにも、短期的な成果だけで判断せず、長期的な視点で ICT 教育を支えていく仕組みが求められる。